



日本の名山として

世界に名高いわが越中（富山県）の立山入は、
だれが初めて登ったのでしょうか。

かの高い険しい山の上まで道をつけて、
頂上に社をつくって帰ったのは、
そもそも何という人でしょうか。

そのお話をこれからいたします。



今から約千二百年あまり前の昔、

もんむてんのう さえきありわか よ
文武天皇は佐伯有若を呼び出して、越中の国

(富山県)へ行き、国を治めるよう命じました。

そこで佐伯有若は一族を引き連れ、近江の国の志賀

(現在の滋賀県)を出発、何日も何日も歩き

くりにからとつせ
倶利伽羅峠にたきました。



ほっと一息してらるや、どいからか、

一羽の白い鷹たかが舞まいおりて有若ありわかの肩かたに止まりました。

「これは、何か良いことがあるまへぶね」

違ちがいな」と

大喜おおよろこび『白羽しらばの鷹たか』と名付け、

大切に育てることにしました。

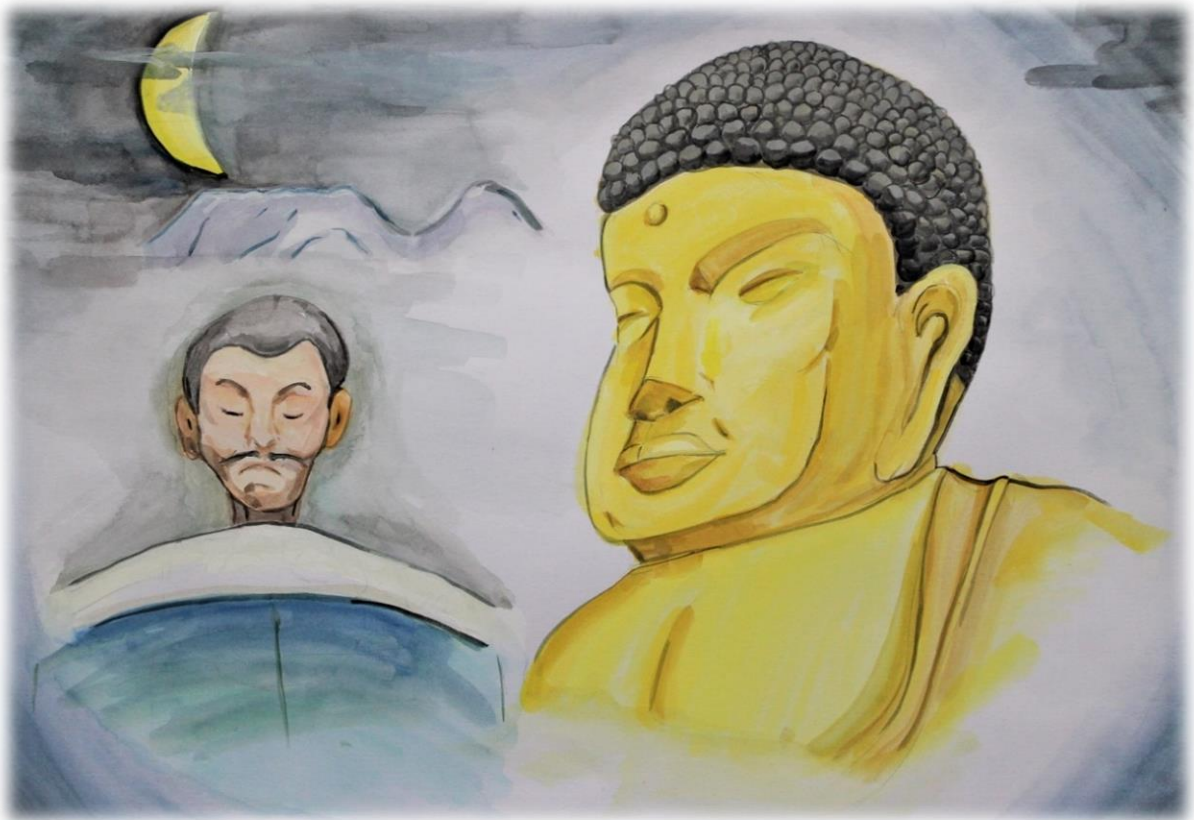
布施川ふせがわのほとりにある犬山ゆかたに館いっしゅうけんめいを建て一生懸命に

国をおさめました。

そして、仕事しごとのあいまには、この白い鷹たかを連れて、

野へ山へと狩りに出かけることを何よりの

楽しみにしていました。



ありわが あいらわが べりしやく べりしやく
有若の努力によって、争い事がなくなり

人々は安心して農作業に精を出すようになり、
のつさきぎょう のつさきぎょう せい せい

しだいに平和で豊かな国になりました。
へいわ へいわ ゆた ゆた

しかし、有若の心には大きな悩みがありました、
ありわが ありわが なや なや

それは後継ぎの子供がないことです。
あとつ あとつ

ある夜、有若夫婦の枕元に立山の大汝の神様が
ある夜 ある夜 ありわが ありわが ふうふ ふうふ まくら まくら うえ うえ に に たて たて やま やま の の おお おお にな にな じ じ の の かみ かみ さま さま が
あらわれて、

「お前たちに 男の子をさずけよう、」

ありわが ありわが
有頼となづけ 大事に育てよ」と
だいじ だいじ

お告げになりました。



それから一年後、お告げのとおり
丸々とした男の子が生まれました。

国中の人たちも大喜びで、神の子として
大事に育てられました。

有頼は、すくすくと成長し、体も強く
その上、たいへん親孝行でたくましい
少年に育ちました。

そして、有頼も白い鷹をかわいがり、
鷹と遊ぶことが大好きでした。



ありよりしよつねん
有頼少年が十八歳になった春のことです。

たいせつ
父の大切にしている白い鷹をつれて、

たかがり
一人で鷹狩に出かけました。

えもの
弓矢を背に、獲物をさがして草や雑木をかきわけ

川上へ川上へと進んでいきました。

えもの
けれども、獲物らしいものは何一つ

みあ
見当たりません。

たか とつぜん
そのとき、じっとしていた鷹が突然飛び立ち、

おおそらたか
大空高く舞い上がり、上空に弧を描いて空を回り

すめい な たかみねやま
鋭く鳴き、高峰山の方角へととどいてきました、

さか たか
いくら捜しても鷹はもびついてもいません。



さあ大変たいへんです。

有頼少年ありちりしやうねんは泣き泣き、城しろに帰りました。

「白い鷹たかは獲物えものをとらずに、どじかに逃にげてしま

いました。私が油断ゆだんをしていたせいですから、

どじか堪忍かんにんしてネネと」「とどろくお詫わびを

いたしました。父はたいそう腹はらを立てて、

「おまえはどじかあってもあの鷹たかを捜さがしてきなれど、

そうしなければ、城しろに帰ってはならぬ」と

きびくつ罵ののりました。



有頼少年は、鷹の逃げた方へ

野といわず、林といわず、

「迷子の、迷子の白鷹やうい 美味しいエサは
ううにある、はやくはやく 飛んで来い」と

叫びながら捜しましたが見つかりません。

とうとう日がくねて、あたりは真っ暗になり、

疲れ切った有頼少年は、岩を枕に

眠ってしまいました。

【立山町一夜泊まり（泊新）】



夜が明けました。有頼少年はまた捜し始め、
常願寺川まで来ました。

川に沿って、ごろごろした岩石を踏みこえ、
険しい道を山の方へどんどん進んでいきました。

岩峠寺というところまで来ますと、

そこには大きな谷があって、向こうの断崖にある

松の大木のこずえに止まっている

白い鷹を見つけました。

【鷹泊・大山町上滝（大山寺）の南】



「あっ、うたっ」

大喜びで駆け寄り、腰からうまいエサを取りだし、

「鷹たかめ ーうーうー、おーうーおーうー

エサをやるの」

何度も呼ぶよ、白たかい鷹は飛んでくるよ、

有頼少年ありよりしゅうねんの手の上うへに止まりました。

有頼ありよりは白い羽をなでたり、

頭をなでたりしますよ、

鷹たかは羽はたまながらうねこねこして止まりました。

そのうちね、



かたわらの草原くわがはらにガサガサと音がしたかと思うと
「ガオーツツ」と

大きな黒い熊が飛びだしてきました。

驚おどろいた鷹たかは、羽ばたきながら高く舞まい上がり、
どこかへ逃にげてしまいました。

「おのね、ゆるしておくものか！」と

持っていたらに、素早すはやく矢をつがえ、

大きく引きしぼり、黒熊の胸元むねもとをめがけて

矢をはなちますと、

黒熊の左の胸むねにビシツと、深ひかく突つき刺さりました。



すげー、

ドミーン

黒熊はいちど倒れたものの、

すぐに跳ね起き、血を流しながら、

山奥めがけて逃げ出していました。

「逃がしてなるものが」

有頼は熊の血のあとをたどり、

険しい岩をよじ登りながら追いかけてましたが

見る見るうちに姿が見えなくなりました。

【由懸・立山千垣】



【立田町芦峯寺】
あし お しげ
芦の生い茂った原っぱに出ました。

ありより
有頼は、どンドン進んでいきました。

あたりはますます険しくなってきました。

「ああ いねは、むじすねばいいんだ…」

目の前はふかい深い谷で、

向うには行けそうにありません。

すんぞ、むじからともなく数十匹のサルが集まり、

藤のしるを持ち寄って、みるみるうちにかけ橋を造り

姿を消してしましました。 【立田町藤橋】

ありより
有頼は気を取り直し、その橋を渡り、

おんやま
奥山へ進もうとしました。



すると今度は、

金色の大シカが現れ、前に立ちはだかり、
行く手をさえぎりました。

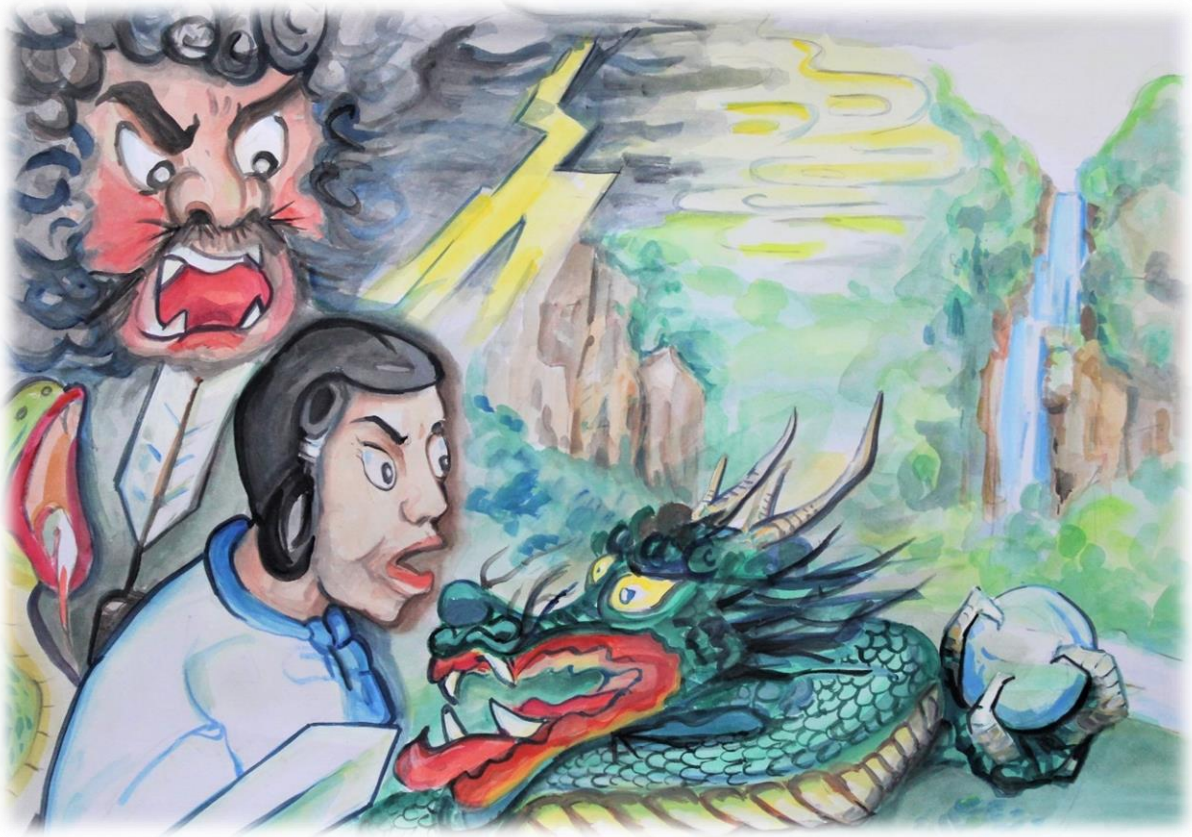
「じゃまだてするな」

気の強い有頼は、

刀を抜いてそのシカに立ち向かい

うち倒そうとしましたが、大シカの気にあてられ

その場に倒れてしまいました。



ありより
有頼の体は、寒さと疲れと空腹で、

おもうようにつづきません、岩陰に生えている

青草を取って食べると体中に力がみなぎり

元気を取り戻しました。

「じくい熊め 逃がさずにおくものか」

岸壁を伝い 熊の血の跡を追い、

いくつかの坂を越えたとき、にわかにあたりが

真っ暗になり、稲妻と雷鳴がとどろき、突然

うなり声をあげた雷獣が暗闇から襲ってきた、

すかさず刀を抜いて切りつけると、たしかに

手ごたえがあり、雷鳴もおさまりました。【断絶坂】



その時です

どこからともなく、大勢の仏様の合掌念仏が
聞こえてきました。

それをじっと聞いてみると、疲れも治り

険しい坂を、やすやすと登り切りました。

坂の眼の前には雲上から落下する、荘厳な大滝

(称名滝)が光り輝いています。

思わず地にひねふして、礼拝しました。

【滝見台あたり】



「いじで引き返してなるものが、

何としても大熊を追いつめなくては

急な雪溪を踏みしめ、岩肌をのぼり、

立ちふさがるはい松の枝をおしはらいながら、

最後の力を振り絞って進みました。

いつの間にか立山の頂上まじか、

雲上の高原に立っていました。

【空雲辺の】



雪の上に点々と残っている虫の跡をたどり、

崖の中腹にぽっかりあいた洞窟に着きました。

【玉殿の窟】

「しめた、この洞穴こそ大事な鷹を逃がした

あのにくき大熊がいる、

今度こそかならず射止めてやるぞ」

有頼は、弓に矢をつがえ、

注意深く洞穴へ踏みこみました。

これは驚いたー！



ありより
有頼の目に入ったのは、逃げ込んだはずの

大熊でなく、さんぜんと黄金色に光り輝く

美しい阿弥陀様のお姿でした。

しかも、その仏様の左胸には、あの矢が深く

突き刺さっていました。

びっくり仰天……

「熊じばかりと思って追いつめたのは

仏様でしたか、本当に悪いことをしました」

その場にひれ伏し夜を通しておわびしました。

すると、仏様はやさしくお話になりました。

「私は 阿弥陀如来である」



「この立山に地獄を造り、極楽を造りました。」

地獄（地獄谷）と言つところは、

生きてゐる時に悪い事をした人は閻魔さまの前で

犯した罪の重さを秤にかけられ、

嘘をついた人は舌を抜かれ、火あぶりの刑、

針山の刑、釜ゆでの刑など、

幾つもの刑をうけます。

地獄はとても恐ろしい所です。

（いざよひ）

行いの良い人は、花畑のある美しい楽園の極楽へ
みちびかれます」



「この山は尊い山です。けれども、立山はまだ

誰にも知られていません。登る道もありません、

多くの迷っている人々を救うため、姿を変えて、

そなたを呼びよせたのです。

どうか立山を開いて国じゅうの人が、

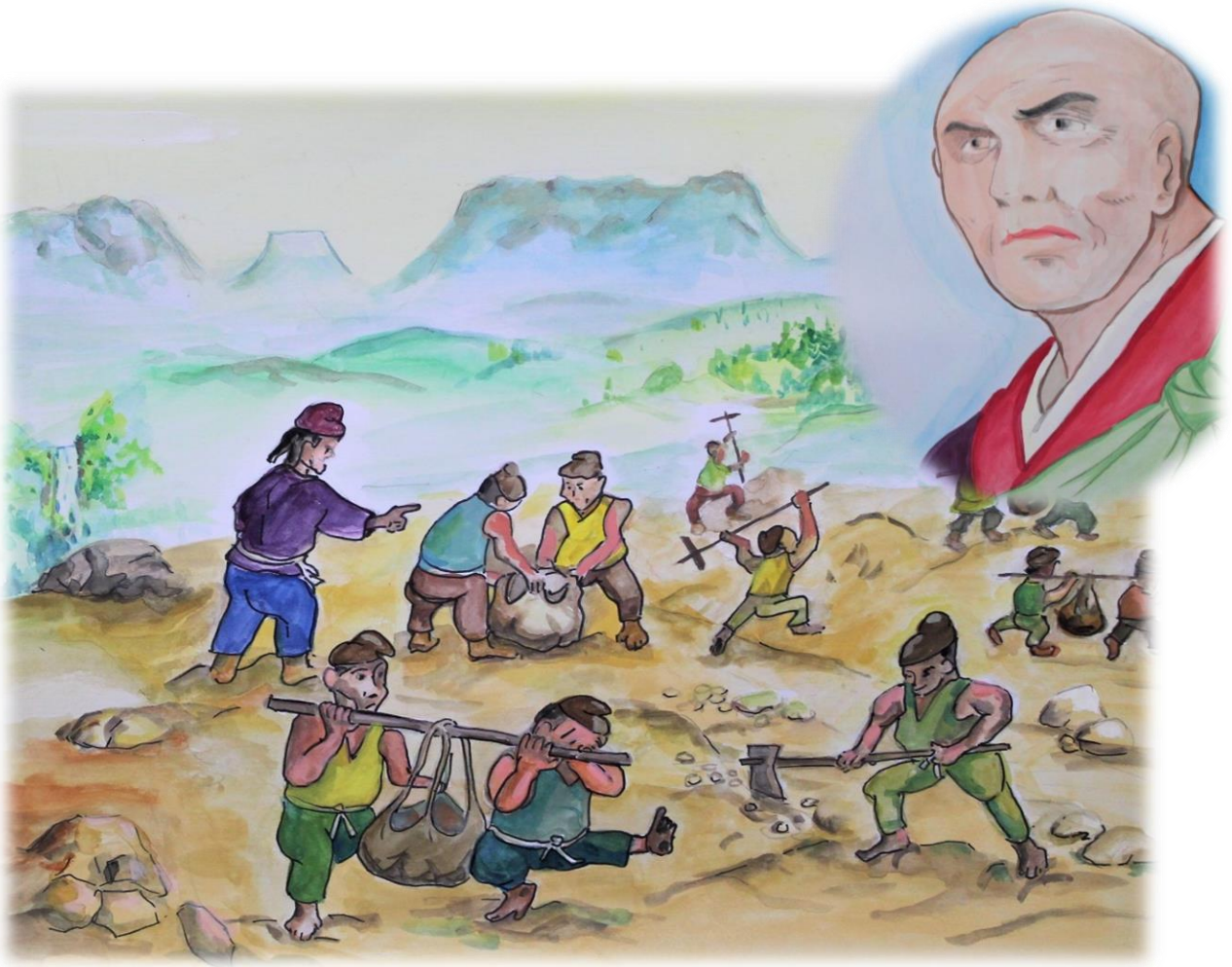
お参りできよう！ — 生懸命しつめいんだら、

それが大汝の神の子である

そなたのしつめなのです」

とおっしゃいました。

有頼は弓矢をすてて、髪をそって仏門に入りました。



そして「薬勢上人」に教えを受け、

名を『慈興』と改め、

仏道の修行にはげみ立山を開くため

全力を尽くしました。

佐伯有頼は出家して、慈興院大徳と

なりました。

現在

経田にある持光寺（地名）に立つお寺、

大徳寺の開祖であります。

おわり